

誌上ひとりワークショップ

(その6)

～ 家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「最終回です。長かったですね、1年以上ワークをやってきたことになります。ここ3回ほどは、“枠のギリギリ外”というテーマでやってきました。どうでしょうか、援助者としての自分の枠を知り、広げることにつながってきたでしょうか？では前回の続きで、本児の仮説ストーリーの“結”の部分を手がかりにした最終回のスタートです」。

(エ) 仮説“結”の部分

ではまた、本児の役は交替してもらいましょうか。ぐるっと回ってみて、どのグループも全員が次々と援助者をやっていました。みなさん、とても熱心ですね。今回はFグループをお願いします。

本児役：Aとの関係は命がけで守る。何があっても、Aとは離れない。ずっと待たなくてはいけないかもしれないけど、いつかは一緒に住みたい。時間はかかると思う。でも、自分がしっかりしていたら絶対に乗り越えられる。それがほんとの人との付き合いだ。それで、家族になれる。

援助者役：そんなに好きなの…。で、もし子どもができたとするよね。Aはいい父親になれるだろうか。キミが育った家庭のようにはないと思う？

本児役：わたしがしっかりしていたら、きっとなんとかなる。

援助者役：キミだけがしっかりするだけで乗り越えられる問題だろうか。家族でしょ、家族はお互いに支え合うんじゃないか？

本児役：そうだけど…。

援助者役：行き当たりばったの家族なら、結局、お母さんと同じじゃない？身体と心は自分で守らなきゃダメだと思うよ。

本児役：そんなこと、言われなくてもわかってる(泣)。

私：う～ん、子ども役の方、いかがでしたか？

援助者役：完璧に予想通りでした。援助者の意図は丸見えで。

私：話すほどムキになってたね。

援助者役: はい、もう絶対に一緒になると言わざるをえない気分でした。

私: で、不自由せずに育った人に何が分かるの、に行き着いて、うんざりからイライラを経て爆発・号泣にいたったんですね。援助者役はどうだった？

援助者役: でも、援助者としてよりも人間として止めたかったんです。

私: 説得できると？

援助者役: まさか(笑)。

私: たとえ『どうせ大人は…』となっても、『叱ってくれる人もいない』よりはマシだと信じてね？

援助者役: はい。

私: 確かに、こういったやりとりではゴールをはずすのはとても難しいですよ。他にありませんか？ だいたいみなさん、こんな感じでしたか？ じゃあ、ちょっとやってみましょうか。本児が「No!」を完璧に予測しているなら、「Yes!」から入ってみようかな。

本児役: Aとの関係は命がけで守る。Aとのことは、自分がしっかりすることで乗り越えられる。それが家族であり、人と人との付き合いだと思ふ。

私(援助者約): うん、それは間違っていない。お互いに自分を犠牲にしても相手を守ろうとする、それが家族なんだからね。

本児役: はい。先生、わたしにできると思いますか？

私: キミなら、できるかもね。

本児役: うれしい。頑張ります。

私: うん。で、Aはどうだろう？

本児役: Aだって、たぶん。

私: シンナーのときはどうだった？

本児役: あときは、自分のことでいっぱいだったから、それで難しかったんだと思ふ。

私: なるほど。自分のことでいっぱいいっぱい、キミのことを考える余裕がなかった？

本児役: そう。

私: キミだっていっぱいいっぱいだったけど、それでも相手を大事にしたのにな。キミみたいに命がけで相手を守るつもりなら、シンナーくらい止められたかもって思ふけど。

本児役: え？ 命がけかぁ…。

私: そう、命がけ。

本児役: 自信、ない、かなぁ…。

私: どうだったかなぁ？

本児役: 別れさせる方向は同じですけど、説得されている感じはなかったです。

私: 選択を否定されるという予想はありましたか？

本児役: ダメ出しは当然だと思ってます。

私: 肯定しながらすすめいったんだけど。

本児役: キミならできるかも、には驚きました。うれしい、よし頑張ろうってところで、Aの話になったのでちょっと混乱し

てしまいました。不思議に反発は起きなかった気がします。

私：意図は同じでも、肯定から入るだけで抵抗は小さくなるでしょ。説得よりも質問のほうが受け入れやすい、これは間違いありません。それから、抽象的観念的な教示よりも具体的行動の“試行”の方がいいでしょう。さきほどのセックスの話のように。この場合は、シンナー断ちの方法をいっしょに考えるのがいいかもしれません。補導中で面接には制約はあるでしょうけど、継続的に会っていきたいケースでした。さて、なにか質問、ありますか？

参加者：枠って、一つだけですか？たくさんあるような気がしますけど

私：はい、おっしゃる通りです。人生観とか主義主張なんてのは、大きな枠ですよ。面接で感じる家族観や仕事観は、ローカルで小さな枠ですね。ほかに世の常識みたいな、その中間くらいの枠もあります。(枠の大きさと縛り具合は関連していますか)。いい質問ですね。どう思われますか？人生観なんて比較的緩い枠じゃないですか？日常的に、自分の主義主張と照らし合わせて判断する場面も、そうめったにあるもんじゃない。対人関係とか適応の難しさを訴える相談で表面化するのは、たいてい家族観とか仕事観です。小さな枠だから、かえって窮屈なんですよ、きっと。

参加者：常識との衝突もあるように思いますけど。

私：ええ、世の常識もそこそこ顔を出しますね。ただ、常識自体にある程度の弾力性というか幅があるから、さほど大きな縛りにはならないような気がしますけど、どうでしょう？たとえば、ボクと皆さん方を比べたとき、常識はさほど変わらないでしょうけど、家族観や仕事観には個性があって千差万別です。(じゃあ、家族の小枠を感じ取ればいいのですね)でも、わたしの小枠を感じようとしてもけっこう難しいでしょ。それに対し、わたしの大枠はなんとなく伝わっているんじゃないでしょうか。家族面接においても、それに近いことが起きている気がします。

事例に話を戻しますね。『母親は身勝手だし、兄弟はバラバラ。自分の家族は家族とは呼べない。そうである以上、家族をあてにせず自分が強くなって道を切り開いて生きるしかない』という問題理解・仮説のベースにあるのは、小枠である家族観です。『母みたいな生き方は嫌だ、自分の身は自分で守るしかない、だから家を出る』という行動選択もそうです。けど、この年齢で母親を見切ってAのもとに飛び込む決断を可能にしたのは、彼女の人生観ではないでしょうか。枠の大きさ・縛りはいろいろだけど、リンクしていることは間違いありません。

ワークを始めた頃に言ったけど、他人の枠に手を突っ込んでそれを変えることはできません。この枠が動くとしたら、それはかつて思いもしなかった想定外の体験の積み重ねでしかないように思います。枠の外側にも世界があると知ったら、母親や家族がいろんな風に見えてきて、“ありえないほどの不運と不幸”な色で塗った自分史を塗り変える日が来るのではないのでしょうか。

11. おわりに

「ほんとに、ほんとに終わりの時間です。いまここで伝えたいのは、“実は、私たちも自分の枠の内側で仕事をしている。家族といっしょに、私たち自身も枠の外にも世界が広がっていることを知ろう”ということです。

最後に、一つの事象を対照的な二つの視点から眺めることを提案したいと思います。左右の目で見ると立体視ができる、左右の耳で聞くから定位しやすい、つまりものごとの奥行きがわかる、そういう意味で絵画の二点透視図法に似ています。

ここまでみなさんと考えてきた「不安と怒り」、「解決努力と問題持続」、「リスクとストレス」、「変えると変わる」、「枠の内と外」、これらはまさに対照的な二点です(図4)。枠に縛られて窮屈に生きているのは、家族だけじゃない。私たちだって、同じような縛りの中で窮屈に仕事をし、生きているかもしれません。

このワークがきっかけで、2点透視図的にものごとを眺めるようになって枠の外にも気持ちを向けられたら、そして家族だけでなく自分たちの枠についても考える機会になったとしたら、とてもうれしく思います。延々とおつきあいいただき、ほんとうにありがとうございました。

図4 2点透視図法による奥行き認識

緊張と緩和の組み合わせ		
感情	表(裏)の顔としての不安	裏(表)の顔としての怒り
解決努力	ねぎらいの対象	問題を持続させる働き
家族要素	脆弱性(リスクファクター)	強み(ストレングス)
家族援助	変える援助	変わるのを支援
手順	心理教育(教える)	質問する、教わる
枠の内外	期待(期待)通り、想定内	予想外、意外、想定外
反応	安心、現状維持	驚き、変化の糸口

52

参考文献

家族が変わる、子育てが変わる、コミュニケーションのヒント 明石書店